續俳家奇人談

上

へ5
2250
4

へ利5
2230
巻 4

得ル所竹窓雪ニ一おのゝ
あつめる所ろ古今の士
の奇特なる書集めるものを其ゝ
僧侶山人ら形利ろおゝ同日ろのあるを
畸人乃影ろ傳ふ佛ろ奇人譚ゝ名は
ろの語也文明の比の語名家よりやゝ宮口傳あれの
ゝ游士の事ろ形ゝ其譚おのゝ一廉ろ体として
ゝ婦結俗の趣ろ形ゝ小ゝ事ろ長さる
ろ故あ所地屋ゝろ乃めるを無ろ先ゝ次道

あんこ餅雪ふる人あふぎ僊俳まこと
ふるまとおもひ情ちく海道ふ俳ありぬ
ちなみに俗ハ学ふかいこと朱子学
性理ことこと指ちく書屋つ集おこと
上梓まことなりぬ俗ハ余ふ序あ俗ハ
ちの学ふも件のあまを論ちく作り
儒ふ一まふもあるさいと異ふけりふ元ちを
学ちまみる宮彫のちいを心場ハちふもあま

学ちまみ中ふも白樺と菓お汐の二譚ハおのふまを
しくみちる学ちつまずおふん話なも書補ふつ
ちを此俗のハちちる出ちる彩ふさる世ちものを
汐三俗の学二を出ふん何ふ学の力を知ふ載ハし
ものと先ふの二俗の世ふおふ所ハちふ倩まあを
ふ俗ふふ学ふ形ふ

大年庚八月

續俳家奇人談總目錄

上卷

一宗長法師　一肖柏法師
一未吉道節　一馬淵宗畔
一宮河松堅　一藤谷貞兼
一乾貞恕　一吟花堂晩山
一堀江林鴻　一岸本調和
一志村無倫　一大野秀和
一高井立志　一溝口竹亭

一高村和及　一四時堂其諺
一五井塘雨　一山本子英
一井阪春清　一田氏捨女　附盤桂禪師
一松倉嵐蘭　一岡村不卜

中卷

一宮司能順　一木因坊
一天野桃隣　附瀨尾桃翁　一逸人二川
一風士梅貞　一瀧方山
一小澤卜尺　一無腸處士
一竹下東順　一從者吼雲
一騷客凡兆　一雅人杜國
一山本荷兮　一宮崎荊口　附此筋千川
一稽翁木節　一僧李由
一磨工牧童　一瓢水居士
一白馬散人　一稻津祇空
一長谷部柳居　一大雅堂　附妻玉瀾
一泉石老人

下卷

一白井鳥醉　一山口黑路
一紫子春來　一慶紀逸
一俳宗祇德　一西島妻
一皐月平砂　一中村敲石
一越谷吾山　一龍門曉臺
一吾竹坊　一玄武坊
一谷口蕪村　一闌更居士
一渡邊岱青　一井上士朗
一川上不白　一寺町百菴
一馬場存義　一春秋庵白雄
一大島蓼太

通計六十有六談

附言

一　道ふ古今の変ゆり俳諧も亦さうこそ世に初編ゆ
續きて古人若俳風奇行を挙ぐ偏人日々こうな
らび古今相遡りて後今の俳諧ゆとかくるべし温故知新乃
ごとくもゆるとや

一　前編ゆ名ゆりて延引し先人の寂寞忌に起天しく卒ま
世ゆ行ふ為ゆ一田氏捨子の一篇を漏さり今あれと加乃ふ
はて大雅堂のゆハ近世時人俳ふ載くりといくも今存生
ゆる老人佐云嘉なる者の物語れるふ俳諧の風流をゆもろ
ひて文の缺くるを補ふ

一　変ふ撰び集る所ハいたゆる古俳客の陸等雑記句集の新
又他古ゆめぐる俳徒その傳写の心しきハ之家々ふ就て古

紀伊びとゝいふ人〳〵猶古画を模写せしめ考へと
加ふるを以て不文を助んとなるふ立るのみなむ人られ
をおもひしるべし

蓬庵閑人書〳〵ものし

有帽子やうの物
ものしてきて
みをりをれ（〳〵）
月

蓬

其角

山村蔵

嵐雪

上立出てうーろ
あゆまや秋乃ふれ

斤攻に脇や
うをりて坊れ
ふれ

東花坊

詩六

欄竹に光るや
菜の花の影はしー

木枯乃地にも
落さぬ
えんぶ

去来

乗込と
まうす都は
何鳥

丈芝

はたは恒の
結めやうう
ん

野仏

越人

散財は人のあつまる
笠雲の元

北枝

風に伸びてたなびく月

海山の島の姿
たつる高波小

松風

鳳凰都於東西雅俗並蒔

續俳家奇人談巻上

故匂當　竹内玄玄一遺編

宗長法師

宗長法師ハ駿河國須田沢の郷治何某がるこ也可今川義忠
の幼少にして死あるを悲しかなしの故事愛て
年あるを或時宗祇に渇しの連歌の句を問るに一と聞く
十と悟る遂に出家しく宗祇改免沢中小草庵を結ぶ
十八にして免法を蓄捨院ふ庵かび後に紫野一休和尚に
参禅するといふ時寺中師翁勅を受て新続波集をえらい
給ふ法師も連歌世八句をのるとえいづれの句にあや
ふ術しを伊勢國罪地義といふ所に者歌庵中乃立
花盛りをけるバ立花乃かりせられて宗祇うれ

師殺しく後同遊打囊て天下花の本れ家近たくべしと勧免
けるに思ひも寄ぬるもと一向ふ免合ね城おく奏聞を必
げるを不屈ぐく其跡くるべしと仰を下ふを清名誉
なくぶや或くく宗野大徳寺禅理法堂ふとぐく成法
長も玉珠庵を建立るに山門いまさ成ら代寛に強く
其修理の業ぐ一を助んと已が秘蔵する宝家玉等れ深
氏物語と鬻くく八十巻文を寄附せ〜ら也永正元年今
門家の被官欲薮安元その居を泉谷ふ移さむ紫屋新
と自歸に逢ぞふ山谷氏是屋くく田附の無住くくふ清し
四号「山樵おりふ色そふ霞うる翠年幾ふ世も古ぐれと
英ぶうく竹と植く「幾若紫は屋〜初免の筆れ竹をう
かく寄人の賞を拉く附合ありしを冠氏の句とハ成ふを

大永の末れ年其竹を杖ふきうく今門君ふ奉るをたおの道
う八十とせの齢ふれバみや「ふの杖ハ雅ふハあく代君と我
八十路の坂をふゆるたけ〜さ岩る一節切と吹く古潭ふ
ありを寄く古竹をりてあそびく平生の楽みとハなし
〜〜時不寄藤八年二月八十六歳ふく物夜せう世俗
連歌の温奥を極く〜そきもえふが中ふ「ふもたゆく
荒き海回を漕免ぐをといく寄て「ゆを元ふ代物紙
〜を〜おりく〜と附句〜〜〜按ぞるふ古今れ意て大舟の
ゆくのたゆくとよりあり新改集ふゆと元ふうも右げき濱城
と云〜れ〜〜法河ふれ〜に依て附〜る可和べ〜ゆと八系の
河加のふとふく清文字古べきやや附録ふ委しく伝道バ古人を
聞初るふとの廣れハ来由なき云紫ハ見出けるとや

肖柏法師

肖柏法師ハ具平親王の末孫にして世自然富家祇王
和歌迷夢の遺統とうけつゝみづから牡丹花と称し付る心敬
宗祇の古信世代去て毎会爭論たゝかひ文亀
二年勅を受けて初めて新式今按を述しゝ其法を伝ず
ひ連俳は後崇高に成にしたがひ
おゝらや深見坊は連俳を牡丹を初夏にいざなふを
花去の愛が愛はよりて祇王と共禁理法舎十六夜月
孤出て「竟に貴くしん歌や幾世秋の月或年雪して
「竟に初るやあるとのぞみの秋の雲と世の人只に其角の句
のゝをいふ」と肖柏ありしを若しなふ祇園法師の雨色
のあるを知づらう附録に老を番として接の池田にかゝる其居成

愛庵と名く庭中小四時の菓を植をうゑ名其形小艶しゝ
春花ともいつて性酒を去れと番を免ぐ花を者はしむ
去迷と三愛三人自の紀あり後ゆ恵あり泉南小移る大
永七年四月四日八十八歳にて死去り南嶺子小いふ先の
こし老人の遺去こゝて秘事は法したる者迷袋水
いへるを見るに小艶未に四月廿日死とあり恐く牡丹も
の名成かり偽化さしのあるべし

宋古道節

宋古道節ハ津の国平野社人員つか入て俳社の上手なり
ある時「宗しゆゝバ雪女のやうなりと彼成歌俗新のの
より雪女に替かしたる働きありふべし法迷ハ文よりも
ふう俳の原節とハ称されこう寛永の江戸に来て

高びゝく泊れと不運すゝく用ひられ仕打うゝの笑ひ懼
りゝく家紋を笑ひ年の暮ふせまゝく義落へる時流
元旦年「完義ハみのゝいきふあゝ小させゝ行あゝく
家の上れるもハあるゝゝ時ふ義意之年之

馬渕宗畔

馬渕宗畔初名重治京都に生れ人と成て忠臣ゝく
ふ仕うふ体の忠誠之道時に〻あて俳社の点料洗来
一両之けるゝ貞徳ふ海ゝえゝく云く其うみ紹巴連歌の点
料共四家と交ゝうゝきけて沈も今より沈軸と第軸ふ発
ゝまゝと仕ゝむ法ゝ俳ゝ紹巴ゝ点料ふ宮ふ式ゝ之圓
も海ゝ例を西ゝく紹巴あを点る畔まゝ沈ふいふ圓仕ゝ点
うゝ比ゝゝ又一殘目まゝたまゝと沈後遂ゝ又殘目とハなれ
り巻の愚稿京ふ海ゝとに〻ゝく初べゝ「深法けゝく花巻や
移仕桔梗四「七賢ゝ捷けむ花そ数つゝき義意四年乃
巻風呂ふ入ゝ中風ふあり遂ゝ黄泉の宮ゝ入ゝり

宮河松堅

文治正由八道柄居士ゝ称仕京大佛堂の毒先沈貞徳の四代
ふ家ふ仕ゝ方ゝ木材墨尾の号あり後松堅と改名せり「茅舎
に育ゝらゝ狩仕りゝく仕「洗濯ゝ盥れ用ふ仕ゝり物巻の温
雅ふ深ゝ見るべゝ始更幼き時沈ふ習仕沈ゝふ獨子自あり
や答ゝいゝく有ゝ「生のゝゝに咲ゝく新新や垣の内沈いざる
ひゝく弟子とゝ仕ゝ後沈の世と稽仕ゝゝ時ゝゝやゝ色く
二十末漱之之ゝ去ゝうびゝく生ゝ巻ゝ沈習仕素より和
家とゝく海ゝく法巻に門人多ゝとふ巣老ゝく疾巻海ゝふ

のぞみく稼世のおとをむとしるに起おとあさいはば人をして料紙とうしわけしめ外方ぐ筆を拾て遠て言く「遠うまで筆と離るべ行みか数うくようも我ぞはうなれ物ぐと捨ゝ忽ち瞑ぐ時了享保十一年二月廿三日疾没

藤谷貞兼

藤谷貞好ハ山崎の人後ハ言る黄れ嶂を避て貞兼と改めう自ゝ猛翁と称し仰雲軒と号し「田住ゝ山の自ひと移し蓋の中「秋九日のいらゝ高いと高出人も少今濃ゞ門みまゝ貞の家を犯し夜ま人あれと殺る家ま拾ゝ今濃誘引ゝ貞濃ハ見えしむ元禄十四年十月死し世を辞し句「月ハみこぼうりや二十九夜来迎

乾貞恕

乾貞恕ハ紙の敦賀の人いづれ年ハ江州大津ハ来り住てより貞室のつ庭ま八入れり「敦賀や深山あり紙さ敷ふ去忘一年ある人の「老くハゆうゞ今秋の蔵人とゆく冬年「ゆぼうふいきう立ゝる馬の糞と附句ゝ大津の宮乃くゝそゝいふ渾名紙ゝ貞ハ後を抱て笑ふ懐ゝ一説ま宮ゞつ子多ゝこいくゝも紙ゆづるべき君ゝ者ゝ去の人く花の宮をあくゝとふ

吟花雪晩山

晩山ハ京洛の人迷雪ハ祖白昌陽父子に交りく言ふ為ふ有きらく俳ハ松堂より伝く吟花の二字をうて雪号せり「出ばうゝや十日の菊れ降ばけゞめ「うきあとの遠く来るなり秋の悼「赤ゝん花の名さや庵ゞし「新綿や治る

世代の弓れおとし世人殊なる手柄の孫なりしハ俳諧山右前ニ
答くし顔物語といふるハよく義助が形りを解きて明石ハ
しく去うえまて援あり元氏の紀州ともなんべし世代
去時の吟「世をのて居や身ハなしハせの蚊柴法師
蛭江林鴻

蛭江林鴻ハ俳和の門人ごうう風雲子と称し烟月老と号し
「ひるくと花のもうむかきうぞ」「ふうけくとれいいも」
永うあ俳社家儒ふいふ鴻う集る所の京洛二条とんうふ其
比一時の俳家ふまと加くあれを称せう雅陸海のとと
り憤ること志し友る永代紀とあるいふ鴻を撰るその云
紫江宋的二代ふ輝る林鴻の流それをおのれふ比るふ色うう
とおれを代ふ宋の林学士と慕ひ崇号をもかの湧金門
ふ泊まる時より志られバく

岸本調和

岸本調和ハ石見の人居を安静ふ住ひ蚕蛾軒と号し
住くと古歌をもいふ寛永の比江戸吳服橋ふ来り住り一芸れ日
や達広大坂も尻りぶく「新橋や伊勢男の蛍の捨ちうも」「蛍
ふうとびて夜の涼うさん」「堀恵の二字やようとの茅場と正徳
八年れ冬去迄まで坊といふ去と綴り居」「去の一句流俗判
なく木かく」と云ひくく時あくく死せり

志村無倫　附倫里　素川

志村無倫ハ越後國の人江戸ふ出くく吟史の門裏ふあそぶ捨蛍軒
住くく雪堂ふも歸ん「ひくくせの伝ひやくく」蕪かる「色まれ
て水をのびる蓮うる」（或ハ野坡が句と云ふ未知何是）享保二年二月死ん線世「ふ

雪月花（神鏡）　白雄（清炎）　不知庵（望月）　有明（二脇）　五

長　三・五

黄一　蓮一　鶴一

重一　金菊一　贊二

雪玉二　銀梅二

鑒蘿二　紅葉七

野梅

江南梅

東閣詩情

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ばしハ水よりハ水へゆきれたるその人是立倫里法をつき穂蓼
軒と称ス倫里死して其子来門跡ぐ立門水軒と号ス家に
いろりてを流ふ「花も穂も茅蓼ようぞ恵め名ち倫里
「るも飲む傍ぐ一口ふ死つぐ」来門

大野秀和

大野秀和ハ江戸の人仙素と別ふ炭翁と号ス「稲屋く
隣りふくしや窓の梅「ふとふに炭けすやト和紫はしぐ炭
何某侯ふ仕ふ豪雄の武士ふるが当時浪人しそもむし
と言れば熱鬢みく面力と常きり色ス其角が或ふに
己が変と咽り笑へると寿て大ひふ憤り居るが打かう
国橋上ふ不図ゆき逢ふ和ふ会うけふいふ汝ふ
ふと申せしはあられ奇怪ふ侍員ふとかれ法ふ

ふとうけふう角ふ会うて仕る変申しられ汝ふ思ふ
ふくいで和ふに孤猴ん去ふのぐ支変ふふ驚く法れふと猴
うあげく言葉を緩ふ挑こいざ江戸ふ行ふく跡を
見ばしく逝出しふう和いあるれふふ無法見長過ぎば
しふく止ぬとなん一時の奇法といふべし

高井立志

高井氏ハ江戸の人先祖より仕る法度ふ仕ふう已ふ
仕ふ仕ふ致しく稽庵休南立南門人ふ家ふ客ふ居て俳諧を
ふふ仕ふく庵ふ或ふ洛の立園江戸へ来ふ立ふ
成ふく立志といふその古ふ来ふ玄札も俳ふふく遂て俳
言を法ふうこふや松楽軒と号ふ「和諧堂ふも「稲尺ふ
印撰ふ小来花「渡永や喧嘩ふ鄭公「芦れ庵乃

石鼠脇ゝ也
移ゝ紙ゝ子ゝ
[illegible]

求めえて
[illegible]
[illegible]

黒[illegible]

萬屋得二所蔵縮圖

こりしゆりこむ痰あり「我手さへ只ハあそばぬ火鉢かな」寛永中に没ス此僧けし免京に於びし此圓水が「中々に小さうりけり探れ口とよめりし「何ゆゑぞ名残よぶ也き附ぐるが遂に一巻と成て於杖折と題名せりこを小序あり其名大而其體小者立志法師と甚小男なるも世に大名有しもと知ゑし

溝口竹亭

溝口竹亭ハ常矩の門人なりしが後に和及竹翁等を友としておれ述行厨を携へて終日遠近の勝地に於て坐して吟し歩しても詠ぜし時として句のなげるハなし「掛鯛も尾鰭のさゆり業細工「蓮子にう津も為巳が好つりき「ふの月燕せいしときゝそ振とある「年忘れ江戸き蕎しく盛りなり元禄年に死す「若後於佛神於多巻といふて世にあらはる今人の知る所なり

高村和及

高村和及ハ貞恕をならひ常長を江く学びて後ハ芭蕉に向んと欲る比洛西壬生村に寓棲し露吸庵壷瑞法師と自号ス「行わぞまのまや山よし子規「くるしくと二日に寄りね出羽その更「人妻に尾のなき秋の夕ぐれあり衣のおもて「長き夜や来ぬ人まつよむ鏡の数あるしの于に「だしくやよみそれ中よ二季おし芭蕉凌冬不凋春再回青とよめる本文を云かなせていとめでたし元禄八年に没ス辞世「我らしも四十四年の花乃あけくれを

四時堂其諺

そ後ハ京師ふあそびて云水の山歌石菖く時を同ふしてそ
ふ交流の時雲と号し「芦田花の水鶏みる松の外」「虫ひく
のけく八猛獣聖の力ふ流るる心ちせ武の清く松ふきくう
勢ひふのまて其黨とそ云くいくも読遥に流れこゆる
変ふ〳〵門人まそりてもれと悪りけるふ孫もれと居然
くく亦わけび其変量知ね庵〳〵の庵右ふえ〳〵び亜
こもろれ滑稽雑俳巻廿四　四季の事実を多く其学和漢す
渉猟ふ古今俳社季立れ去事しくいくも世世の古ふ世ふ
若ふ〳〵といふふそびれ初ふ人なきこと成

五井塘雨

塘雨八京師の人号を五井ふ俳社八を依こもろと和ふ庵
性猿を好むの癖あり〳〵常に門戸を鎖しくく遥ふ諸国
行脚れ紀と著して茂埃随筆十二と名く俳容れ日記去の書
より大なる八ふ〳〵光学ふ宏識くその紀ふ温ふ美能
ふ〳〵食ひ漂居せふ者八ふ〳〵ふのあくも農民の事若と
ふ〳〵其変を思八ふ〳〵んや彼季伸うかりうさかりひ出く
「柱〳〵より日〳〵の初いま稲の穂まく云く杜鵑老初春八
芸より紀く宣教松陰れうと「おとぎ比れりひもうけび芸
唱八ふ〳〵そふ〳〵で初苦ふ〳〵る茅茨に秋郭公と「時雨
ふ〳〵〳〵小雲の秋風ふ萩咲ね水や夢芸こり〳〵きと和と
引く「ふ忘細〳〵小萩ゞ寺の庭〳〵ぎく

山本子英

山本子英八勢州松阪の人加皮ゞつるこいゞ迫の山〳〵にうの
けん江戸へ下り浅草ふうふ住居せ〳〵ゞ晩年業を加へ寿

宗歌が移りて正徳中に死せりと聞えしと白一白魚れ戸田
れはしらうや杜宇「あしたに本うしろに豊守れぬるまゝ
治涼のふ白魚若白魚の須賀河若新が一ノ本戸に入らう何
なるゆふや英がいなみしをたして入白しらを後去迷城
怒涼と聞く新うのしらく盛をを人を我を死ひるなるこバ
を公のうらも菓紫法すく恢ぶべしこ晒く涼ぎ無今
新が風雅を感じく世白を拾ふと丈若新去の白俳唱へく
治涼涼と甚云と涼ぐ見若風雅れ宴とつふるのしら
いけむ

井阪春清

井阪春清はりと江戸の娼家より生る既より已が業とすと聞俳
変とけるはようけ迷ど幾程もなく涼京春清と名乗を

いう免しく武芸をうざりて兵術の師くと自称し當く
立圃が涼を慕びて頗る俳才あり「若侍人や菓れ相を食む
嵐草」時に世ける人のしや花俳を若田宣時が菓白無行
の時巻改よらうば迷才之涼ぐを立うこうや後まく醫
ゆふしちゆう剃髪して名を玄春と改め小八町堀に住く
形ハ俳道をも投けし菓意四年の秋祖庭町に別宅
をうきく井坂留雲新と大ひなる標札を出し花英を呼し
て奴婢多く先抱しく侍く時行医の上手なりと一時
世の人を誑く金銀おのれが狂落より涼恐を忘れくかし
けるにいひなしける夜つひふハ計やびれく落そくちく迷
くりや老かよべる年れ書ふ一ふれ行らふ涼ぐくや
老のむざかど述懐せしが程なく死きり

田氏捨女　附　盤桓禅師

捨子ハ丹波の國栢原田氏の女なり妙心より風流のきびしゝ
見ゆ六葉九冬「雪の松二の字くれゝ竹の節」されバ一年
庵主となりけるとより「蛍来にかゝや捨かく雪の丸」と
いつる句たゆうゝ支もゆかしし婚め季吟法師ハ後て和
尚をもよくし俳諧ハ友ありて後松尾ふるといふ「雑煮く
やゝ代の数かく花ごゝろ」「うき中ハ別く雪百れ嫁菜哉」の
「日ぐしやはて〻垂て雪ぬる見ぬ身下のきりを」「桑ハ穂
やみハ数なるゝね女房ハ」「こゝろの表家族へ嫁しく祝元
なるく嬢となる夜ち髪けづやく妙融こいふ」「うし比浄
古律をゝるびしゝ元老〻」盤桓禅師の法つふハ
より菓庵と播州網干の里に結びく不徹庵と号ハ元禄十一
年八月その地ゝ寂ハ菓六十八遍しく嶺雲貞閑禅尼と号ふ
田氏ハのられる句句ハ「秋風の吹来るかゝふ糸柳」「ほそ〻ゝ義仲夕べうゝ芒羅髪の時のあなるべし」後の人
辞世とおりくるゝ花ゝくハ花ゝくむ
播磨の盤桓禅師ハ元禄年間の人ゝ其法流世ふゝや
ゝ近代の後動せゝ迷て大法正眼玉沙と遍ハ古の沙仏道
修行の後ふりと幻挑歌廿一首俳諧ぜゝ原今世ゝ初る和
ゝ又俳句あり「叶ゝ本よ海ゝ示ハゝ」の句ハ元禄の寿と号ハ道愛明
の一孫なるべし

松倉嵐蘭

松倉嵐蘭ハ板倉家の武士一松君といさめく用ひら迷ど
遂ふ仕ハ後しく浪華のわゝふ匿る蕉門の風雅ハ「ゝゝく

と安くも立りつのるけ「ちる桜うぬ花見の彩や相撲とり
「小夜時雨降くはるる傘の音「子や流んこそ子れ母も蚊の食ん
あれ菊紫の秋より綾ふ文字をうく〳〵意見個成尤為紹鉄
後年月のうめふ獄舎に拘び帰路病く殁せり蕉翁見がた
めふ建仁作る其略よいとく金華を稱うく敢て撓まざるハ
士の志く拙うた文質偏ちるとりく老子の切とし風業ハ
義を骨うて実を腸ふし老荻を魂ふうけく風雅を肺肝
の中ふあそびしむ年とはふむ四十あまり九とせ之けるが此
之年バうをおつうと宮を縛して老母を為ひ雅子をは
ぐ〳〵こ〳〵いまぐ世波ふ〳〵ぐよふされぐ之業辱の罵うく
居〳〵ふ云ふ〳〵仲秋中の之日田井金沢の浪拘年月殺
涙ふうて獄舎に杖をひきをうくるさうち恵く云ふ

しき廿七日の夜七十年れ先達七業の雅子ふ思ひを嬢を
いまぐ惜むべき黐ひの之十年ぐにたく〳〵云色つる睦月
ばうを稚子が手紙をうく年が業尾に来を彼ふ名残をし
べれようとのふ玉戒之業の眼ばうふ〳〵こ戒れ一字戒
はみく嵐戒とハ名く宝焼づふ色いま月のあうう戒ら
れ生る時むつまし〳〵ぬをぐたなくてぞ人ハと思バるふ
固し〳〵父の如く子のおとく手れ如く是の如く事ふいひ
別迷むうひうる俳の魂の徒ふ縛わふ迷く拘も涙ねぞうう
く筆をとうく思ひをのべむとはるふ才法をすくいんとはる
ふ猶ふうぐ〳〵飛おしまづきにかゆをそ夕べの之ふむふ
のみ「秋風まれく熟き桑の枝

岡村不卜

思村不卜ハ本町の門人江戸堀江御ふしみち一柳軒と号し
「悪疫」して癖いとハゞ世代の業「牧ぶぶく男ぶりの田
植かな」「業ハ閑かち死れる迚も還暦元禄四年に死きり
世老をゞめ續れ系を慕ひ叙ふ人とせむとせ先の向乃園
を俳諧の根を踏のよといふ心なるし今濱れ系つぎとう
記巻ふ去ろぐれ去と第紙あそせて武蔵野のふる紀友
ぐら紀の伝ゞに判せ〻人ともあぐ伝先我も系しむ
あゝハなりぬ云その中ふ撰左持「撰ちる涙生の日ハ忘迚
ゞ」其角右「そぼ姫ゆ狂傘伝し〻屋ゞ伝ゞ不卜
素堂老人の判ふ左右ともに等し生田の表年者をあら
ばと古ふ紙吟じて筆を伝し〻たく伝を嫌撰左「伝うさみ
ゞ〻あそぶむ嫌排ひ峯白右勝「嫌ゞうてちハ先ゞ紀伝ゞ
不卜蕉翁判年古白清鶯の愛と夫ハび感ふ日紀ゞゞ〻侍
れど先ゞ〻紀伝といひし〻白のいきわひ狂まゞうて冥え俳
迚ハ徒と古人先古人奇合の俳ふ去ゞひし〻ゞ伝の風俳な
ゞ蕉し